

平成 27 年 4 月 24 日

## 平成26年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)	海外共同 ・ 共同研究 ・ <b>個人研究</b>	
研究代表者氏名 所属職名	太田和子 国際学部 教授	
研究課題名	アカデียน・ディアスポラに関する考察 — 「世界アカデียน会議 2014」 —	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
研究期間	平成 26 年 4 月 1 日 ～ 平成 27 年 3 月 31 日	
海外共同研究を実施することになった経緯 (海外共同のみ)		
研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書  なし		

## 研究実績の概要（1）

「アカディアン」とは17世紀初頭～18世紀にかけて、主としてフランス南西部から、かつての北アメリカ・フランス領（現在のカナダ東部）へと移住した人々とその子孫を指している。

18世紀中頃に激化した北アメリカにおける英仏間の抗争下で、ついに1755年、アカディアンたちは居住地からの追放という歴史的事件に遭遇する。約1万人が、イギリス軍によって、当時のフランス領ルイジアナやカリブ海のサントドマング（現在のハイチ）、ペンシルヴェニアなどの北米イギリス植民地へ強制移住させられたり、イギリス本国やフランスなどに送り返されたりした。今日、「アカディアン・ディアスポラ」と呼ばれているものである。

各地に離散したアカディアンの子孫たちは、移住先で何とか生きのび、特に現在のカナダ東部（マリタイムス）と、アメリカ南部、ルイジアナには、合わせて100万人に及ぶ人たちが暮らしている。

筆者は、1980年代初頭から、この集団に注目して、調査、研究を行なってきた。今回は、彼らの「エスニック・リバイバル」「民族文化復興運動」の中核となっている「世界アカディアン会議（2014）」に参加して、行事そのものの参与観察を行ない、アカディアン・コミュニティの新たな動向を探った。この会議は、1994年に第1回目がモンクトン、シェディアック地域で開催されて以来、5年に1度、各地で行なわれてきており、今回が5度目となる。

第1回目はモンクトン大学を中心として、当時の国連事務総長ブトゥロス・ブトゥロス・ガリ、フランスの文化相、カナダの首相、州知事たちも迎えての大規模な国際会議として、世界中から注目を浴びた。その後、ルイジアナで北米大陸移住400周年記念と重ねてカナダ・ノヴァスコシアの聖地グラン・プレで、さらにはニューブランズウィック州のアカディアン・ペニンシュラで、そして、今回はセント・ジョン川溪谷をはさむ、アメリカ合衆国とカナダの国境、ケベック州との州境というユニークなセッティングの中で、会議が開かれた。

期間は8月8日から24日まで、15日の守護聖人マリアの祝日の中にして、前後2週間あまりであった。

今回の会議の特徴は、

1. 国境、州境をまたいで様々な行事や活動が各地のコミュニティで実施されたことであろう。このことは、後になって線引きされた国境や州境の影響が、どのようにこの集団の人々の文化を変容させたかが如実に明らかになる。そのよい例は言語であろう。もともとアカディアンの母語はフランス語なのだが、アメリカ・サイドのメイン州の住民たちは、すっかり英語が彼らの言語となっている。一方カナダ・ケベック州の住民はフランス語オンリー、またニューブランズウィック州の人々は多くが二言語使用者となっている。

2. 次第に変化しつつある先住民との関係が行事などで一層目に見える形で強調されるようになっており、人々がそのことを自然に受けとめるようになってきている。

3. アカデミックな研究部門が充実度を増し、そうした部分の役割が大きくなっている。

4. 今回、活躍した中心的なアーティスト達は、若返りしていて、音楽の傾向もこれまでと少し変化した。ただ、ザッカリー・リシャルは、アカディアン／ケイジャン文化のアイコンとして異彩を放っていた。また、アカディアの代表的な芝居、アントニン・マイエ作の「ラ・サグウィン」を数十年にわたって演じてきた女優、ヴィオラ・レジェの活躍ぶりが今回は目立った。

5. ルイジアナからの参加者がやや少なかったせいか、食文化やケイジャン音楽、ダンスに精彩を欠いていたのが気がかった。

## 研究実績の概要（2）

6. 8月15日の聖母被昇天の祝日には、一万を超える人々がカナダの国境の橋を渡って、特別な行事「タンタマール」に参加。大変な盛り上がりを見せた。この行事は回を重ねるごとに、規模が拡大していくように見える。教会の役割もこの時には顔を見せる。こうして第5回目の「世界アカディアン会議」は盛会のうちに幕を閉じた。だが、今後の課題も見えてきて、会議終了後そのことが大いに論じられた。

論点の一つは、次第に会議の規模が大きくなって人々やコミュニティの活性化につながるのはよいことなのだが、開催地の負担が増していることも事実であるということ。もうマイノリティ集団として、カナダやアメリカ社会からその存在を認められ、存続に問題がないと思われる今日、この会議の意義や必然性はなくなったのではないかという声も少なからず出てきている。

しかし、大議論の末、次回（第6回）の世界アカディアン会議は2019年、プリンス・エドワード島を中心として開催されることに決定した。その後のことは持ちこしとなった。

以上が「世界アカディアン会議2014」に参加しての概要報告である。

「世界アカディアン会議」の詳しい考察や分析、アカディアン・コミュニティの現状、展望などに関しては追って紀要論文で論じる。